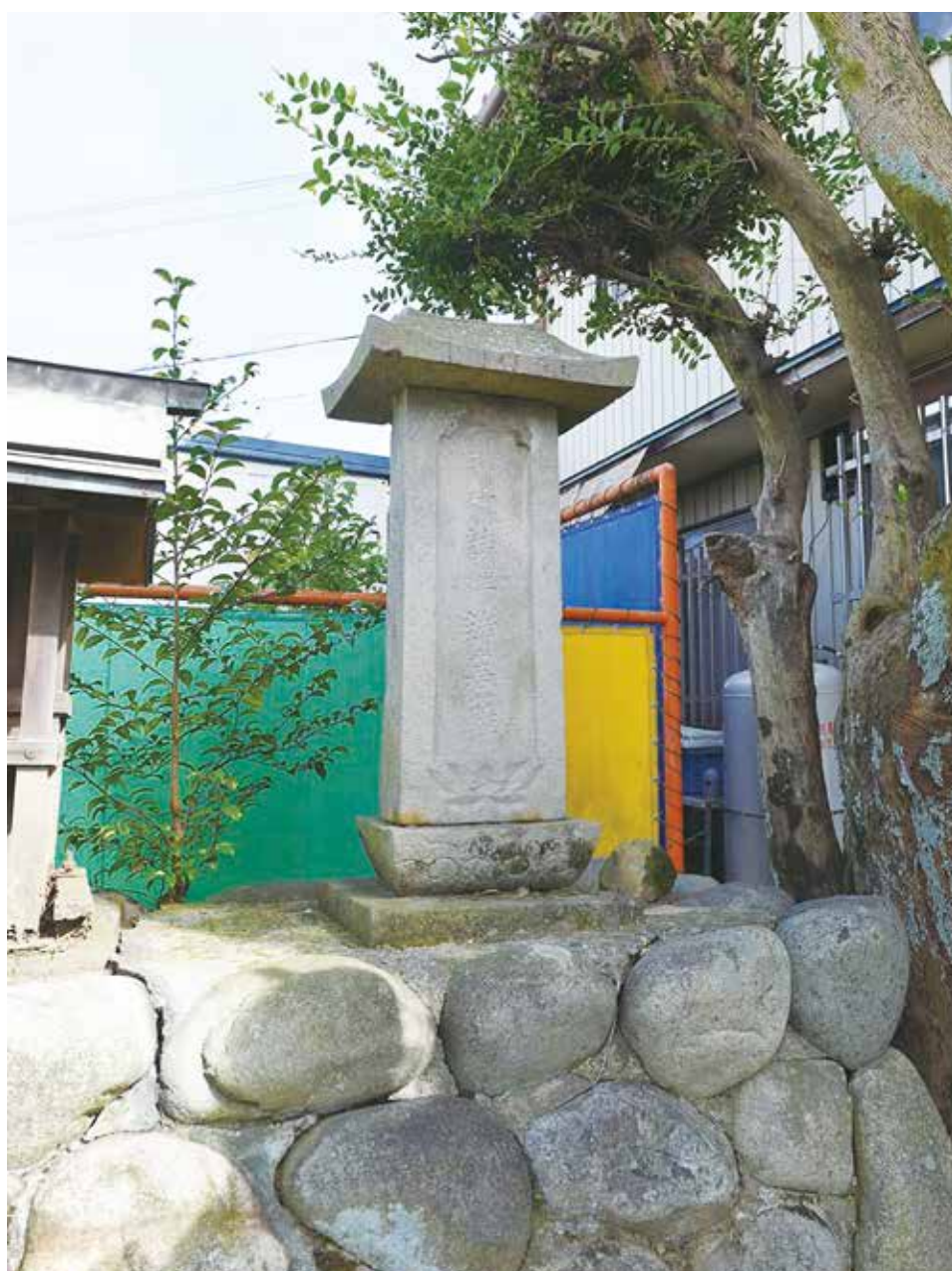


犬山学



第8回・第9回・第10回犬山学サロン開催
全学共通科目「犬山学入門」講演
2019年度犬山学研究スタートアップ研究報告



「五郎丸のキリシタン殉教者石碑」 犬山市大字五郎丸の万願寺交差点北西にあるキリシタン殉教者石碑(1712年建立)。撮影者：中野耕司

筆文字：犬山城白帝文庫 理事長 成瀬淳子

第8回犬山学サロン 犬山の潜伏キリシタン史跡

開催日時:2019年9月26日(木)16:30~18:00 場所:名古屋経済大学 3B1 講義室

長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産が昨年(2018年)、世界文化遺産に登録されました。潜伏キリシタンたちの共同体が二百数十年間の迫害時代を生きのびたことが世界に認められたわけです。しかし他方、同じ潜伏キリシタンの信仰を持ちながらも、この迫害期に徹底的に根絶やしにされてしまった共同体があります。それが尾張と美濃のキリシタンです。

あまり知られてはいませんが、江戸時代初期この地方にも多くのキリシタンがいました。しかし4代將軍家綱の時代、1661年3月美濃でキリシタンの摘発が始まり、まもなく尾張藩領内各地に波及して信者の大量検挙・大量処刑に発展し、領内のキリシタンを徹底的に根絶させました。数年間にわたるこの一連の過程が「濃尾崩れ」と呼ばれています。



五郎丸殉教者石碑

処刑の最大のピークは寛文7(1667)年でした。寛文7年正月老中から宗徒の処置について厳しく詰問された尾張藩は、キリシタン殲滅に覚悟を決めました。その結果、7月までに745人、ほかに乳呑児14人を召捕り、藩主の裁可を得て断固処分。同年12月14日、尾張藩は江戸表に、斬罪並びに釣殺(磔のこと)で756名、残牢の者405名と報告しました¹。しかし別の記録によれば、同年7月に644名斬罪、10月に830名余斬罪、他につるし殺し、牢死の者も多くいたと記されています²。特に壊滅的打撃をうけたキリシタンの村が、犬山の五郎丸です。約200名の村人のうち約半数が処刑され、事件後およそ20年経っても人口100名を越えることがなかったそうです。

1 清水紘一「寛文期尾張藩のキリシタン禁制について」(『金鯉叢書 第六輯』1979年所収227-262頁)230-232頁参照。

2 東京大学史料編纂所蔵「寛文年間尾張国吉利支丹穿鑿ニ付覚書」。五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館1990年240頁参照。

3 村井早苗『幕藩制成立とキリシタン禁制』文献出版1987年122頁。



五郎丸殉教者石碑 諸神諸仏諸菩薩

濃尾崩れの意義について、村井早苗氏の言葉を借りれば、キリシタン禁制政策に関しては、御三家筆頭の尾張藩といえども幕府の介入を受け入れざるをえませんでした。このことは、幕府の諸藩に対する権力集中を意味します。幕藩権力は切支丹禁制をいわば梃子として宗門改・寺請制度を確立させていき、幕藩体制を寛文期に完成させました³。

犬山の潜伏キリシタン史跡の意義もそこにあります。犬山のキリシタンたちは、御公儀の権威を誇示するためのいわば見せしめとして利用されたと言えるでしょう。現代的に表現するならば、非人道的な軍事独裁政権の犠牲となった彼らの足跡は、思想信条や表現の自由といった基本的人権の尊さを暗に訴えているように思われます。



講師プロフィール

カトリック中央協議会列聖推進委員
浅井 太郎

1970年生まれ。
2012年司祭叙階
現在 名古屋教区司祭・カトリック中央協議会列聖推進委員

第9回犬山学サロン 小牧・長久手の戦いと内久保砦

開催日時:2019年11月19日(火)16:30~18:00 場所:名古屋経済大学 6F1 講義室

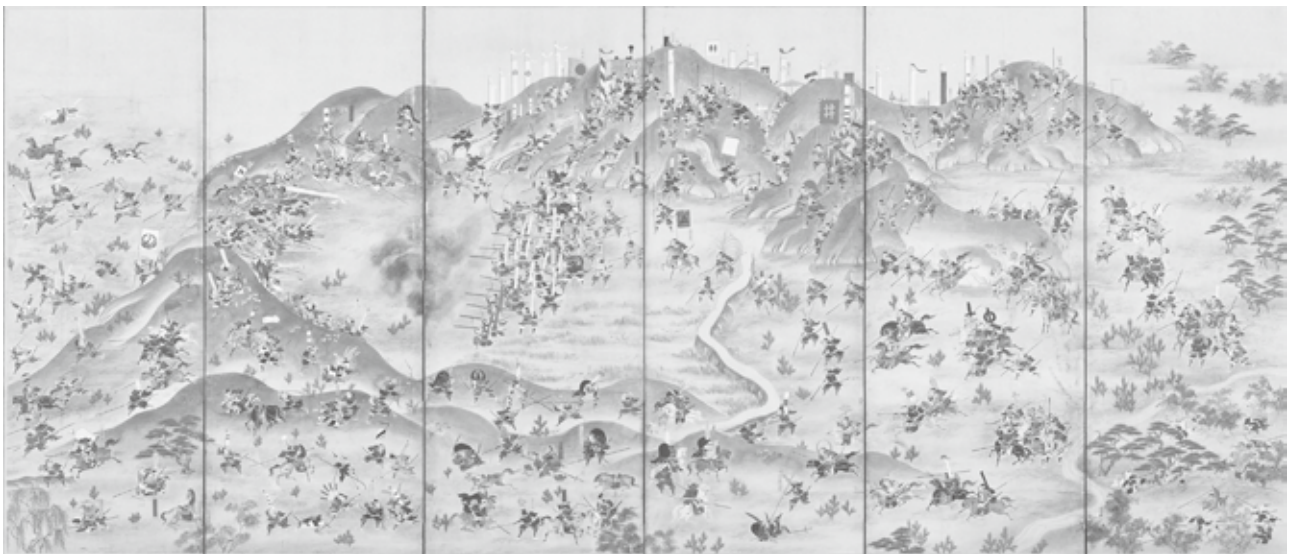
織田信長が本能寺で横死した後、清須会議を経て織田政権は信長の孫・三法師(後の秀信)を中心に柴田勝家・丹羽長秀・羽柴秀吉・池田恒興の4宿老の合議体制に移行した。しかし、秀吉は信長2男・信雄を擁立し、本能寺の変の翌天正11年(1583)に賤ヶ岳合戦を引き起こし、信長3男・信孝と柴田勝家を排除して織田家中の第一人者へのし上がった。

織田家は信雄が事実上の頭領となるものの、秀吉は信雄にも圧力を加えるようになる。これに反目した信雄は徳川家康と連携し、同12年3月6日に秀吉と通じる家老3人を斬殺して秀吉に宣戦布告を行った。戦端は信雄の領国・伊勢国で開かれたが、戦線は尾張北部へ移り、織田・徳川勢は小牧山、羽柴勢は犬山から楽田にかけて滞陣し、3月17日の八幡林合戦では織田・徳川勢が勝利を収めた。両陣営は周囲に複数の砦を構築したことで、城郭戦の様相を見せることになる。

た。しかし、合戦は全国の諸大名にも派生しており、この後、秀吉は織田・徳川に味方した諸勢力をことごとく軍門に下していく。また、家康領国も災害で疲弊しており、秀吉の侵攻があれば滅亡寸前の状態だった。同13年におこった天正大地震によって軍事侵攻は中止となり、家康は辛うじて命脈を保てたものの、秀吉に人質を指し出し、信雄も家康も秀吉に臣従することを余儀なくされた織田・徳川勢の完全敗北というのが小牧・長久手合戦の真相である。この合戦により秀吉による下克上が完遂したといえよう。

引き分けとする評価は、徳川政権が樹立した後に糊塗された歴史感に過ぎない。そのため、9ヶ月にわたる戦いの中でも長久手合戦のみが特出して語られてきたのである。これを神君家康神話という。

なお、現在名古屋経済大学がある地は、羽柴方の内久保砦があった場所とされている。同じ丘陵続きに外久保



長久手合戦図屏風 徳川美術館蔵

従来、この滞陣の打開を図るためと、八幡林で敗れた森長可とその岳父・池田恒興が挽回を図るために三河侵攻作戦を秀吉に強請して4月9日の長久手合戦になったと解釈されていたが、秀吉が丹羽長秀に出した書状から、三河侵攻は秀吉の発案であり、長久手周辺の織田・徳川方の諸砦陥落も目的とした軍事行動だったと解釈されている。羽柴方は秘密裏に三河へ侵攻したわけではなかった。

長久手合戦は池田恒興・元助父子と森長可が討死する羽柴方の完全敗北で終わる。この後、信雄が11月15日に秀吉と単独講和したことで9ヶ月に及ぶ合戦は終結し、家康と秀吉の戦いは引き分けだったと従来紹介されてき

砦・小松寺山砦があったとされるが、いずれも数千~数万の大軍を収納できる規模ではない。これらは単体の砦ではなく、秀吉本陣の楽田城の前衛として、旧領全体に軍勢を展開させる一帯化した砦群でなかったかと推察する。



講師プロフィール

金城学院大学非常勤講師
原 史彦

東京都江戸東京博物館、東京都写真美術館、徳川美術館の学芸員を歴任。東京大学史料編纂所特別研究員、愛知県史編纂委員を兼務。専門は江戸幕府政治史。

第10回犬山学サロン 犬山の材木商 神戸家のネットワーク

開催日時:2020年1月7日(火)16:30~18:00 場所:名古屋経済大学 6F1 講義室

鉄道が整備される以前の犬山は、木曾山・飛騨山で仕出される材木筏をはじめとする木曾川水運の拠点であった。1596年(文禄5)犬山城主石川光吉から湊取締り役を任じられたのが鵜飼屋神戸弥左衛門家である。今回は、神戸家の事業と人的関係の一端を紹介する。

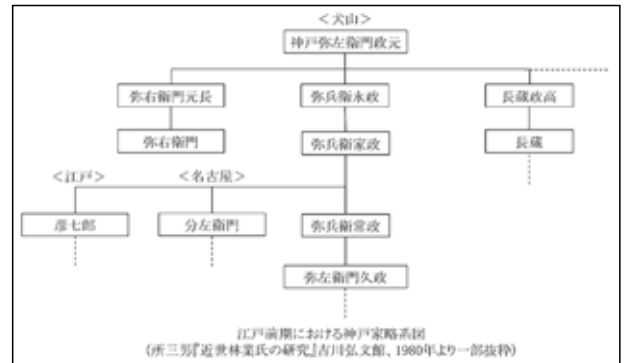
まず、水運、特に筏の中継業である。筏には、藩、時に幕府が仕出した御用木筏と商人が仕出した商木筏があるが、低く抑えられた前者の運賃に比べて、後者は5、6倍高い。犬山湊の統括者である神戸家は徳川政権下でも運上銀等を尾張藩に納めており、商木筏の高額運賃がそれを賄っていた。なお、筏運送においては、犬山湊は次の中継地である円城寺湊と協力する必要がある。両湊は、江戸初期に担当範囲や料金をめぐって対立したこともあったが後に和解に至り、1655年(明暦1)には円城寺湊取締り役野垣(野々垣)家と姻戚関係を結んでいる。



本曾川流域(犬山史通覧編上)より

次に材木仕出し事業をみる。仕出しには、藩の許可を得た商人が元締めとなる場合と、藩が主導する場合があります。後者においても商人が請け負うことが多かった。建築ラッシュの江戸初期には材木関連業も盛況で、神戸家も1616年(元和2)頃より仕出しに参加し、大きな利益を獲得した。1669年(寛文9)名古屋と江戸に分家を置いたのは、材木流通販売の拠点とするためである。しかしこの頃から、材木関連業に陰りがみえはじめた。森林荒廃に起因する洪水多発を憂慮した幕府や藩は、1660年代に相次いで森林保護政策を開始し、18世紀に入るとそれは

強化されていった。一方、1692年(元禄5)には木曾川支流飛騨山が幕府領に編入され、筏の運賃収入も圧迫された。



こうしたなかで犬山・名古屋・江戸の神戸三家はそれぞれ、それまでに蓄えた資本を元手に、金融や貸家経営、さらに新田経営にも手を広げていった。新田に関しては、まず犬山の神戸本家が、犬山城主成瀬家内部の者から申請許可に関する助言をもらいながら、1695年名和前新田(現・東海市)を開発した。続いて1707年(宝永4)には三家が協力して大宝前新田(現・弥富市)開発に取り組んだ。出資額やその後の経営からすると、取り仕切ったのは名古屋神戸家である。開発直後に水害を受けたために、新田は当初計画より面積を縮小することにはなったが、次第に新田経営は安定に向かい、名古屋神戸家は18世紀前半の享保・元文期に材木取引から撤退している。材木関連事業を取り巻く環境の大きな変化に翻弄され、また材木屋鈴木惣兵衛のような新規商人が台頭する中で、安定した存続の道を探る神戸家の姿には、興味深いものがある。犬山本家のその後の状況が定かでないのが残念である。



講師プロフィール

南山大学経済学部経済学科教授
林 順子

南山大学経済学部経済学科教授。専門は日本経済史・近世尾張経済史。主な研究業績に『尾張藩水上交通史の研究』(清文堂、2000年)、『新修 名古屋市史』資料編近世一(共著、名古屋市、2007年)、『近世前期の名古屋材木商犬山屋神戸家の経営』(『犬山城白帝文庫研究紀要』第2号、犬山城白帝文庫、2008年3月)などがある。

全学共通科目「犬山学入門」講演

開催日時:2019年11月26日(火)11:10~12:40 場所:名古屋経済大学 6F1講義室

犬山城と成瀬家は、2019年で約400年間の付き合いになる。初代にあたる成瀬正成は、縁あって徳川家康という稀代の武将と出会い、若いころから側近として重用され、その家康に人柄を買われて、彼の息子を預かることになった。しかしその地位は、陪臣に下るというものだったが、彼は主君に直接頼まれたことを誇りに思った。そして、この名城と出会うことになったのだ。彼の教えから、その後歴代の当主は、犬山城に特別な思いを抱き、いろいろな苦難と向き合ってくるようになった。



成瀬家は家康の教えか、孔子の論語や四書を重視してきた。それでも江戸時代260年間は、幕府、尾張藩という後ろ盾があり、犬山城の維持において少し楽であったと私は思っている。しかし明治維新により、主家と家臣の関係が崩壊。それに時代の流れによって、犬山城は一時行政所有となった。これによって犬山城は、成瀬家との関係を喪ったように見えた。しかし不思議なことに、「濃尾震災」という天災を機に、犬山城はまた成瀬家と歩みを一緒にすることとなる。ところが成瀬家は、江戸時代のような後ろ盾を失っていて、一家で犬山城を支えることは、相当大変であったと考えられる。そのため明治以降の四代は、精神的にも負担が多かったに違いない。それを表すように、濃尾震災の犬山城の復興を行った9代目は、修理終了後2年で他界したと思う。戦後、昭和34年に起こった「伊勢湾台風」の復興・再建に携わった祖父も8年でこの世を去った。そんな歴代当主の姿を見て、私は多くの部分修理を行い、天災にも、防火・防犯にも強い犬山城を目指してきた。しかしそんなに備えてきても、天災は突然やってくる

るのである。それが一昨年起こった天守鯨の落雷であった。これが私にとって初めての天災経験となった。しかし代々成瀬家は、今迄に起こった天災のおかげか「備えあれば患いなし」の精神を持ち、私もあまり動揺しなかった覚えがある。



近年、保存修理を終えた天守から城下を望む

晩年、父は私に「粹に生きろ」と言った。その意味を私は当初、理解できなかったが、今は少しわかってきたような気がする。私が思うに、現代は人に余裕がなく、なんでも型にはまった考えが多いように思う。そしてネット社会においては、個々の解釈によって良し悪しが判断され、書き込みが行われている。そのため、我が家のような旧家の生き方は、時に社会に理解されづらい。父はそれを「殿様の粹」として、私に成瀬家の持つ考えを貫いて生きてゆけということをお願いしたのであろう。初代以下歴代の当主の生涯を見ると、その時代に合った考え方のセンスがうかがえる。私もこの「粹」の考えを私なりの考えで守っていきたいと思っている。



講師プロフィール

犬山城白帝文庫 理事長
成瀬 淳子

第12代犬山城主成瀬正俊の長女として東京に生まれる。昭和62年昭和女子大学卒業。大手印刷会社、広告代理店に勤務。平成12年1月父正俊より、国宝犬山城と成瀬家伝来の所蔵品の維持保存を全面的に任せられる。平成16年4月1日財団法人「犬山城白帝文庫」設立、理事長に就任。白帝文庫を通じ、文化財の維持保存と古くて新しい情報の発信に尽力。

チームで食育 —学校・地域・大学が連携して犬山の食育推進を— 名古屋経済大学 人間生活学部 管理栄養学科 准教授 倉橋伸子

犬山市では、「第2次みんなで進める 犬山健康プラン21」を策定し、健康づくりを基とした自己実現と生涯現役生活の達成を目標としている。本研究では、プランの基本方針にある健康的な生活習慣の実践として、児童を対象とした食育に着目した。活動としては、学校給食の活用と子どもへの食育活動の2つの実践を試みた。

実践①「犬山の学校給食を考えよう」では、不足しがちな栄養素を献立に取り入れ、児童生徒に給食として提供し、その内容を提言にまとめ児童生徒に伝えることで栄養に関する理解を深める方策を展開した。アンケート結果から給食に取り入れることで苦手だと思われる食材も児童生徒は食べることが示された。

実践②「作って学ぼう —簡単!朝食づくり—」では、食品の選択能力を高めることを目的として3色食品群を活用した栄養教育と調理体験を組み合わせた学習を実施した。アンケート調査からは教育的効果が示された。

この実践が可能となった背景には、犬山市が単独校

方式であり提案献立の導入がしやすかったことがあげられる。また、栄養教諭や学校栄養職員が配置されており食育活動の基礎があることも、食育推進の土壌となっていると考えられる。しかしながら、学校における食育に関しては、組織的に取り組むことや栄養教諭の配置の促進など改善の余地があることが指摘されている。食に関する指導に関しては、充実してきたもののその効果がなかなか見えにくい状況も課題となっている。

今回の健康的で栄養に関する理解を深める学校給食の提供やよりよい生活習慣につながる栄養教育の展開モデルの提案は、犬山の食育の価値を高めることにつながると考える。健康づくりは、健全な食習慣が身につくよう行動変容できることが重要である。そのためには計画的な食育活動が必要である。今回の研究に協力いただいた犬山市教育委員会には深謝するとともに今後も市民の健康づくりを大学として支援の幅を広げていきたいと考えている。

犬山を知って日本列島の生い立ちを考える

名古屋経済大学 客員教授 高橋 裕平

犬山学研究スタートアップとして「犬山と周辺地域の地圏情報の利活用」を行っています。山野を歩いて、足元がどんな地質(岩石)からなるかを調べ、それを表した地図(地質図)を作っています。名経大の学生実習としても行っています。



犬山とその周辺から日本列島の成り立ちを理解できます。中生代はじめに深海ででき、中生代中頃に大陸に付加したチャート、中生代終りに地下に貫入した花崗岩、新生代になり、日本列島が大陸から離れ日本海でできはじめに起きた火山活動のなごり、鮮新世の湖(東海湖)の礫層などを観察できます。

これらをめぐる地質ガイドマップを準備しています。名鉄沿線駅からのハイキングコースを利用します。地元の皆さん、観光客、地学に興味のある中高生に利用してもらおうと考えています。

コースの一部を下記ウェブで公開しています。ご意見お待ちしております。

http://y95480.g1.xrea.com/hiromi_line_geology.htm

犬山が生んだ日本初の薬学者下山順一郎

名古屋経済大学 経済学部 教授 菊池 好行

日本の薬学の草創期を担った下山順一郎は、城前広場の胸像になっている人物である。本研究では下山の犬山での生い立ちとその後の活躍との関連について調査している。詩文画を得意とした藩校敬道館の教授村瀬太乙から本草学(植



物学)を学んだことが、後の下山の生薬(植物など天然物由来の薬物)研究に繋がっていった。東京での勉学で成瀬家から援助があったこと、東京移住後も薬学の専門知識を故郷に還元すべく『犬山壮年会雑誌』に寄稿していたこと、濃尾地震で被害を受けた犬山城の修復に多額の寄付を行ったことなど、下山と犬山との深い関係が明らかとなった。今後も解明を進めていきたい。